池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』論

―名前の物語の行方―

山根　繁樹

はじめに

池澤夏樹の『マシアス・ギリの失脚』[1]は、その名のとおり、ナビダード民主共和国大統領マシアス・ギリが大統領職から失脚する物語[2]である。物語は、次のようにして語り始められる。

《朝から話をはじめよう。すべてよき物語は朝の薄明の中から出現するものだから。》

そして、物語冒頭には、街中に貼られたビラに書かれているものとして、次の言葉が仕掛けられている。

《**大地は汝を受け止めるであろう**》

物語の最終段階に至ると、この言葉は、マシアス・ギリが飛行機から島に飛び降り自殺することによって《成就》される。

《**大地は汝を受け止めるであろう**、という言葉はかくして成就された。》

この物語において、ビラの言葉は、マシアス・ギリの死を予言する言葉となっている。「予言」として機能することは、ビラの言葉が、物語のプロットを超えて物語の行き先を示している、ということを意味する。逆にいえば、物語は、ビラの言葉が「予言」となるように展開されるのである。

では、そのビラを貼ったのは誰か。この物語において、その「誰か」が判明することはない。つまり、物語内容のレベルにありながら、この物語自体のプロットを支配しているビラの言葉は、無名の何者かによって発せられているのである。マシアス・ギリを中心に据えた物語は、実は、同じ物語内部にいるはずの、名前を明かされない者の言葉を実現する物語なのである。

そして、そのこと自体が、この物語のメッセージを明かしているともいえよう。物語の内でマシアス・ギリがどのように考え、どのように行動するにしろ、この物語世界は、無名の何者かの言葉が「予言」となるような論理によって支配されている。そして、ビラの言葉が「予言」として機能することは、その言葉を発した無名の何者かが、この世界の論理を知り、その論理を実現しうる者として定位されていることを示してもいる。マシアス・ギリはこの世界の論理を知らず、無名の何者かはこの世界の論理を知っている。あるいは、マシアス・ギリが、無名の何者かの論理、つまりはこの物語世界の論理を知り、自殺によってビラの言葉を「予言」たらしめる過程こそが物語の内実である、ということもできる。そのとき、その無名の何者かの論理は、マ

シアス・ギリの思考よりも優位に置かれているといえるだろう。さらにいうならば、そのような物語は、無名の者の優位をこそ語るためのものなのではないか。

本稿では、そのことを確認しつつ、名前を持つ者と持たない者とが関わり合う物語の様相を明らかにし、その意義を問うてみたい。

一　マシアス・ギリの振幅

マシアスは、政治家としても実業家としても成功している。そして、ナビダードは、政治的にも経済的にも国際社会に組み込まれている。しかし、一方で、この国の人々を精神的にリードしているのは、メルチョール島の長老会議であり、大巫女たちであり、大巫女ノ頭である。この結果、ナビダードには、二つの現実[3]が併存している。一方は、政治・経済的なレベルでの現実である。大統領マシアス・ギリが支配するのは、この日常的な現実のレベルにあるナビダード民主共和国であり、そこで彼は独裁者として君臨している。他方、ナビダードの人々は、メルチョール島に住む無名の人々の叡知を絶対としており、そこには、無名の者の集合体としての共同性（以下これを「無名の共同性」と呼ぶ）が形成されている。そして、この共同性という現実は、《霊》とも《祖先》とも《力》とも呼ばれながら結局はっきりとは名指されない、不可視の領域と連動しているのである。マシアスの失脚は、マシアスには統御できない、無名の共同性の側から要請されたものということができる。

共同性の側の意志を体現し、マシアスの失脚を図るため実際に行動する人物は、アンジェリーナの館で「マリア」と呼ばれ、大統領官邸で「エメリアナ」と呼ばれる女性である。さらに、その女性に従う、七人の弟たち従弟たちが登場するが、その名が明かされることはない。ただし、事態の変化は、アンジェリーナの館で見かけたその女性を官邸に呼ぼうと考える、マシアス自身の選択によって始まる。

《これからの数週間は多くのことがらが大きく変わる、そういう時期なのだ。メルチョール出身のあの若い女がなぜこれほど彼の関心を引くのだろう。日常の論理で考えてみればおかしいと彼自身も思ったが、しかしこの時期だからこそそういうことも起こると思えるのだし、逆に彼女が自分の前に登場したこと自体が、この彼の人生にとって特別の時期の到来を告げているとも言える。》

《若い女》を官邸に呼ぶことは、マシアス自身が持つ《日常の論理》を逸脱すると自覚されている。しかし、メルチョールを《霊の力の島》と考え、《若い女》の予言の力を信じるマシアスは、《若い女》を呼び寄せることによって、無意識のうちに、一ナビダード人として、共同性の側の要請に従ってしまうのである。だが一方で、《日常の論理》を逸脱することは、《国民》を代表する《大統領》という自己同一性を脅かす世界、およびそれを動かす論理を想定させずにはおかない。

《自分たちは本当に自覚のとおりに自分自身の判断で動いているのだろうか。現実という舞台装置の背後には、それらすべてを動かしている演出家や道具方や機械仕掛けが隠されているのではないか。自分の手足には見えない糸がついていて、上の方でそれを操っている者がいるのではないか。急にたくさんの糸が自分の身体にからみつくような錯覚に襲われる。》

しかし、《現実》が《舞台》であることは、物語の冒頭から、すなわち早朝マシアスが目覚めるところから、マシアス自身のありようが示していたことではないか。自分の名前を百回唱えるという《朝の儀式》がそれである。マシアス自身、名前を唱えることによって、《大統領》という役になりきっているのである。

《「ナビダード民主共和国大統領マシアス・ギリ閣下」、これを一回、二回と意識の一方で数えながら、口を動かして、きちんと唱える。それが自分だと自分に言い聞かせる。他ならぬおまえが他ならぬナビダード民主共和国大統領マシアス・ギリ閣下なのだ。おまえがその役をきちんと果たさないかぎり、この国には大統領というものはいなくなってしまう。その後の混乱、その後の渾沌を思え。それを思って、心を込めて、唱えよ。おまえこそは大統領。すべての権力を握る者。

百回唱える。これが全部自分の名でなかったらどんなにいいだろう。まだまだ自分に戻っていない無人格の頭のどこかをそういう考えがよぎる。》

ここで語られているのは、マシアスが、毎朝、大統領としての自分の名前を唱えることで、その役を引き受けているということである。そして、一方では、その名前を空疎なものとも感じている。名前を持つことで《大統領》として《舞台》に上がるマシアスは、その名前に何の価値も見出せない毎朝の状態から、日々空疎な名前を引き受けながらその役になりきっていることになる。

しかし、このような認識は、《大統領》になりきったマシアスには微塵もない。マシアスは、大統領としての自らの決断に強い自信を持っている。それを支えるのは、自分の名前を空疎だと感じ、国というものに意味がないという認識とは、正反対の認識なのである。

整理してみよう。マシアスは、毎朝、無意味だと感じられる自分の名前を唱えることにより、《大統領》としての自己同一性を獲得するのであった。そして、その役作りは完璧で、変貌後、《大統領》としての自己同一性に疑いの余地はない。しかし、アンジェリーナの館で見た女性を官邸に呼び込むという行動は、不可視の領域と連動する共同性の内にある自己存在を、意識化する契機となっているのである。

マシアスは、「エメリアナ」と呼ばれることになったその女性が大巫女の第七位だと知る。そして、彼女に引き寄せられるようにして、ユーカユーマイの祭に、大統領という身分を隠して参加する。マシアスは、四番目の聖域においては《大統領》として、その場に強い違和感を抱いている。

《彼は全体の中の無名の一人ではなく、まるで官邸にいる時と同じように歴然と大統領だった。ひややかな目でこの前近代的な、何の根拠もない、祭礼という行事、まったく無意味なエネルギーの浪費、日常性の停止、等々を見ているばかりだ。祭の霊が自分だけを締め出しているという気がした。（略）まるで大巫女たちが神事によって追い払おうとしている人々の不幸の源泉が自分であるような気がする。自分はここでは異物だ、という気がした。》

ここでもはっきりしているように、《全体の中の無名の一人》であることと、《大統領》であることとは、マシアスの中でまったく異なる現実を構成している。一ナビダード人として無名で祭に参加することは、大巫女ノ頭を現世的な頂点とする、共同性の中に在ることを意

味し、大統領であることは、自らを頂点とする《国》という政治・経済的な現実の中に在ることを意味しているのである。それは、マシアスにとって、どちらか一方が虚構であるということではなく、どちらかに埋没しきった時、他方が意味のないものとして見えるという関係にある。そして、物語は、マシアスが《無名の一人》としての自己存在に同一化していく過程、つまり、無名の共同性の側に振れていく過程を語っているのである。

二　無名の共同性の勝利

マシアスは、ユーカユーマイ最終段階において、《無名の一人》として祝福される。

《ようやく自分はここへ帰ってきた。親の代まではメルチョールの者、たまたまの事情でバルタサール市で生まれはしたが、気持ちの上で常にメルチョール人だった。遠い地域をさまよったあげく、今ここに帰ってきて、エゴの鎧を脱ぎ捨て、ここのみんなが共有する精神の中に溶け込み、それをこれほど嬉しく思っている。浄化されてゆく自分の内部、聖なる舟と大巫女たちに発して彼の中を洗い清める精神のさざ波、揺すられる心の快感を彼はしみじみと味わった。無名の者として絶対の恩恵を受けるだけの立場というのは、なんと喜ばしいことか。》

ここで得られた認識は、《大統領》に戻ったマシアスの内にも留まる。そのことが、最終的には自殺を決行するマシアスを支えてもいるのである。このように、《大統領マシアス・ギリ》をユーカユーマイまで導き、マシアスに《無名の者》の喜びを自覚させたのは、「エメリアナ」と呼ばれる女性である。そして、その女性こそが、メルチョールの意志を代表する者として、大統領の失脚に向けて動く。ただし、この物語の内では、「エメリアナ」を動かす「意志」が、個人に帰属することはない。つまり、「エメリアナ」の行動だけでなく、あらゆる出来事が、名指されない何者か、あるいは何者かの集合体の意思として現象していたとされるのである。それは、メルチョールを柱とする共同性を支えるもの、あるいは、《無名》の一人一人を溶かし込む《全体》と繋がったものであるともいえる。

そして、《大統領》としての自己同一性を失う時、マシアスもまたその共同性の内にある自己存在をはっきりと認識し、ビラの言葉を成就することになる。大統領職から実質上失脚し、メルチョール島にやってきたマシアスは、浜で「エメリアナ」と対峙し、《ナビダード人》として《流れ》の中に在ることの、《大統領マシアス・ギリ》として在ることに対する優位性を認識する。

《さまざまな力が自分をかつて日本に送り、後にギリ商会を発展させ、やがて大統領の地位に押し上げ、それから失脚させた。それら多くの力の一つとして、それを担う者として、エメリアナと七人の弟たち従弟たちがいた。彼女は自分の意志で失脚を画策したわけではない。この世界にあって個人の意志は何も決めない。すべては大きな流れの中にあり、われわれはそこに浮いている。そういうことが明快にわかった。他の独裁者が何歳まで政権にしがみつこうが、どれほどの贅沢をしようが、それと自分を比較するのは無意味だ。自分は独裁者である以上にナビダード人であり、

メルチョールの者である。だから、自分の独裁は必ずこの土地風の形を取る。それがわかっていれば、すべてを与え、すべてを受け入れることができる。ナビダードは自分を生み、ナビダードは自分を回収する。》

最終的にマシアスが辿り着いたのは、政治・経済的な意味でナビダードを支配した自らの生涯を、《大きな流れ》に《浮いている》ものとする認識である。その認識においては、個人は無力であり、「マシアス・ギリ」という名前を持ち、その名前によって他と区別される個としての深淵を抱えた主体は、《大きな流れ》の果てのなさへと解消される。したがって、この認識は、結局、「マシアス・ギリ」という名前を持った存在の説明しがたさを、《大きな流れ》という超越性の内に回収してしまうのである。それは、名前を持った主体が抱え込むさまざまな困難をその主体から解放するという意味において魅惑的であり、それゆえ逆に、その主体自体が抱える歴史性をも消し去ってしまう危険を持っているのではないだろうか。日常の現実よりも《大きな流れ》が優位にあるとし、《個人の意志》を無力なものとすることは、日常の現実世界や、その中に現れる個人の、他に替えがたい歴史性を単純に無化してしまうように思われるのである。

以上のように、この物語は、「マシアス・ギリ」という名前を持った主体が、《無名の者たち》の全体性へと解消されていく物語として読むことができる。つまり、名前を持った存在は、その全的には理解しえない他者としてのありようを解消し、《大きな流れ》から与えられる役割を果たして回収されることになるのである。そのようにして、物語は、無名の共同性の優位を語るのだといえよう。

三　名前の様相

この物語は、名前そのものについて多くの語りを費やしている。たとえば、この物語の舞台となっている群島の名前は、古来「ガラギラグラ」と呼ばれ、近隣の人々が付けた《あだ名》が語源とされる。その後、スペイン人によって名付けられた「ナビダード」、日本統治時代に呼ばれた「泪島（なみだじま）」など、外に立つ他者との関わりの中で付けられたこの群島の名前は、そのままこの群島の歴史と関わっている。また、語りは、母の遺品の中にあった《名刺》に記された「宮倉忠二郎」という名前を自分の父と信じるマシアスにとって、《父とはその名刺そのもの》だと語る。このように、物語は、無名の共同性を語る一方で、名前についてのさまざまな事象を語り、いわば「名前の物語」とも呼べるような内実を備えている。

そのような物語の中で、名前は、外と関わることに付随して与えられる。それは、現実的な外部を持たないユーカユーマイの祭で祝福されるのが無名の人々であり、それによって共同性が再生産＝維持されること、その共同性に入れない人々にとってユーカユーマイの祭が意義を持たないことにも反映しているといえるだろう。

それでは、ここで、登場人物の名前のありようについて考えてみよう。まず、物語の中で変わらぬ名を持ち続けるのは、アンジェリーナやイツコ、カツマタといった、外国の出身者である。彼等は、基本的には、ユーカユーマイの祭に代表される共同性に入れない[4]。ただし、たとえば日本からの秘密特使、鈴木貫六などとは異なり、政治・経済

的な意味でのこの国の現実に、確立された位置を持つ。

一方その対極には、ユーカユーマイの祭で祝福される無名の人々がいる。そして、その人々は、広場で会話する人々に繋がってもいる。

《人々は買物に来るついでにこのベンチに坐って、噂話を聞き、自分が知っていることを伝え、勝手な意見を述べ、小さな話がどんどん大きくなるのを楽しむ。この時この場に集まっていたのは十五歳から八十五歳まで、男女とりまぜ、社会階層もさまざまで政治的信条においても雑多な人々。彼らがこの広場に来た途端に広範囲な情報収拾能力と精密な分析力と総合的な判断力をそなえた一流の評論家になる現象をどう説明すればよいのか。広場の力、すなわち集合的な民衆の叡知はこの島では昔からとりわけ強い（これが自分にとって最大の脅威であるという認識がないのは、現在のギリ大統領の最も大きな弱みである）。》

ここで語られているとおり、広場の会話は、物語の内でマシアスが誰にも明かさない事柄、誰も知るはずのない政治的な事柄にまで言及していくのである。そして、そこにあるのは無名の人々による《集合的な》《叡知》とされ、それが、個人では至り得ない認識をもたらすものとして、名前を持った個人の思考に対し、優位に置かれているといえる。

さて、外国出身者と無名の人々の間にあって、名を持つ人物のうち、マシアス・ギリと初代大統領コルネリウスとの間には、ある種の共通性が見られる。それは、名前を選択するという態度である。

《この建物を造ったコルネリウスのことを考える。あの黒い顔と灰色の髪、たしかに人を魅惑する微笑と、決断の後の徹底した無表情。彼と違って四分の一のドイツ人の血を堂々と誇ったあの姿勢、三十歳になった時に勝手に自分で命名したというそのローマ風の名前。ずっと彼につきまとっていた誇大妄想の匂いは、彼が見事に初代大統領に就任したことで、いわば現実によって追いつかれ、事実になってしまった。》

コルネリウスは、その名を自分で命名することによって、日常的現実の側で政治を動かす初代大統領となっている。また、マシアスにも同じような名前との関わりが見られる。

《たしかに、こんなに事業のために身を粉にして働いてくれるんだから一緒になってもいいというのがマリアの気持ちの大半だったし、それを受けて、いわば事業的人格として結婚という形で合併を実現しようというのがマシアスの気持ちの大半だったのだから、その意味ではこれは経済的な結婚であった。実際、マシアスはもともと実体のなかった母の戸籍を抜けて、かつては自分の雇い主の姓であり、今は婚約者の姓であるギリの一族の一人となることをほとんど自動的に受け入れたのである。》

ここで語られているように、「マシアス・ギリ」という名は、マリア・ギリとの結婚によって得た名前である。また、《母の戸籍》がいかなる姓であったのかは明かされない。そして、マシアスは、「マシアス・ギリ」となることによって事業家として成功し、それをコルネリウスに認められて政治家への道を歩んでいる。コルネリウスは、新たな名前を選択することによって、マシアスは、事業家として《合併》を選択しそれに伴う名前の改変[3]を受け入れることで、政治・経済的な現実世界で活躍する者として造形されている、といえよう。

四　無名の使者／匿名の語り手

一方、もう一人の重要な登場人物、「エメリアナ」の場合は、ややこれとは異なっている。彼女は、登場した場面では「マリア」という名で呼ばれ、官邸に呼ばれると「エメリアナ」という名を持つに至る。彼女は、マシアスと初めて会話する場面で、名前を問われ、《付けて下さい》と言う。

《「だが、元からの名前があるだろう。生まれた時からの」
「新しい仕事には新しい名前」と相手は言った。
「アンジェリーナの、マダムのところでは何と呼ばれていた？」
「マリア、女中のマリア。その他にあそこにはマリアが二人いましたから」
「そうか。すべて女はマリアだから」と大統領は言った。「ここではマリアでない方がいいのか？」
「ええ、違う方が」
「では、わしの母の名はどうだ？」また、はるか昔に死んだ母親の顔が浮かぶ。「母はエメリアナだった」
「よい名だと思います。そのようにして下さい」と女は言った。》

まず、「マリア」という名がマリア・ギリのものであることを忘れるべきではない。当初マシアスは、この女性を大統領の職務のために官邸に呼んだのであり、マシアスの仕事を支えるべき女性として選ばれる者の名前は、マシアスの成功を支えてくれたマリア・ギリの「マリア」でなければならなかった。そして、ここで《母の名》の「エメリアナ」が与えられることは、物語の終わりに彼女がマシアスの子を身ごもり、母となるであろうことと符合している。それは、そのような《流れ》の優位性を語る物語が要請する、必然であるといえる。その意味では、彼女の名前は、以前その名前を持っていた人物がマシアスに関わったときの役割を示す記号なのであり、そのことは彼女が無名の共同性からの使者であることと矛盾しない。

また、彼女の言葉である《新しい仕事には新しい名前》は、ある意味で「マシアス・ギリ」や「コルネリウス」にも妥当する。《新しい仕事》である事業や政治に向けて名前の改変を選んだことは、ナビダード人として共同性の中に在ったはずのマシアスやコルネリウスが、その共同性から距離を置くための必然だったと考えられるのである。

次に、「エメリアナ」とは別の、記号としての名前を持つ二人組、ケッチとヨールはどうだろうか。この二人は外国人だが、マシアスと初めて会った時、名前を聞かれて、ペアになった幾つもの名前を挙げた後、「ポール・ケッチ」と「ピーター・ヨール」と名乗っている。

《対でないからたぶん本名なのだろうと思ったマシアスが、その夜、小さな自分の家に戻って念のために辞書を引いてみると、ケッチとヨールはそれぞれにバーミューダ型二檣帆船の種類だった。ミズンマストの位置で微妙に分類される。ポールとピーターは、パウロとペテロ。十二使徒のうちの最も重要な二人。では、この名も偽名か。》

この二人は暗殺者であり、その仕事上の理由から《偽名》を使っていると、とりあえずいうことができる。ただし、彼らの名前が定かでないことは、「エメリアナ」と呼ばれる女性との対比においても見る

ことが可能である。アンジェリーナに、酒を飲みながら二人で何を話すのかと問われ、《言葉で世界を作っている》のだと二人が答える時、それを見ていた《メルチョールの若い女》は、次のように語られる。

《そこでふと彼が見ると、しばらくホールから姿を消していたあのメルチョールの若い女が部屋の隅に立ってこちらを見ていた。自分たちが今話していたことに興味を引かれたのだろうか。じっとこちらを見ているその目付きは、どことなく挑戦的に見えた。どちらが上手に世界を作れるか、比べてみましょうと言っているようにヨールには思えた。》

ここで、《メルチョールの若い女》すなわち「エメリアナ」および「ケッチとヨール」の名前のあり方は、物語内容および物語言説それぞれのあり方と深い関わりを持つと考えられる。

「エメリアナ」は、無名の共同性の側からやってきて、《大きな流れ》を日常の世界において実現する、つまり、マシアス・ギリの失脚を実現するべく行動する。そして、そのような人物として、固有名を持たず、その時々の記号をその身に引き受ける。彼女の本質は、無名性にこそあるのだといえる。

一方、ケッチとヨールは、ナビダードを脱出後、場所も時間も確定されないバーで語り合い、実際に《言葉で世界を作る》語り手として自分たちを定位している。

《「どうだ、もう一度最初からはじめないか？　すべてよき物語は明けがたの薄明の中から立ち現れるものだ、という一番はじめのところから」

「いいよ。時間はいくらでもあるんだから」と軽く言って、ケッチは二人のグラスにたっぷりと酒を注いだ。》

この、物語を閉じようとする最後の語りは、ケッチとヨールがこの物語の語り手であったと明かし、しかも物語を循環させようとしている。しかし、ここで、《ケッチは》とも《ヨールは》とも、あるいは《ケッチとヨールは》とも語る語り手は、はたしてケッチ、ヨールなのであろうか。少なくとも、ここで酒を飲みながら語り合っている時点での二人ではないといえる。つまり、循環していく物語は、《ケッチとヨール》が語り手だと語る語り手が、常に《ケッチとヨール》の背後に退き、匿名の語り手として語り直していくものなのではないか。そうであれば、《ケッチとヨール》という名の記号的な性格は、語り手が常に背後に退いて語りを循環するための、仮に与えられた名であるように思われる。ケッチとヨールは、物語内容における、無名の共同性と政治・経済的な現実との相剋において、そのどちらにも加担しつつ、どちらからも距離を置く。そして、その物語内容自体を、自分たちによって語られたものとして、「語ること」の内に回収しようとする。つまり、自らも登場する物語を、自らが語ったものとして、「語ること」の優位を際立たせること、これが《ケッチとヨール》の役割である。それは、出来事を語りの内に回収し、語り続けることをも語りの内に回収するための装置であろう。つまり、《ケッチとヨール》だったと明かされる語り手の本質は、そのような装置を機能させるために歴史性を削除された、匿名性にあるように思われるのである。

以上のように読む時、この物語は、物語内容としては、無名の共同性の勝利を、物語言説においては、語ることの出来事に対する優位とその永続性とを指向しているといえる。

五　物語への抵抗

ただし、そのことは、ナビダードの一方の現実である、世界を覆う資本主義の網に捕らえられた島の生活や、アンジェリーナやイツコがそうであるように、脱現実的な虚構世界としての来世や輪廻を自分のものとできない個人の困難を、とりあえず忘れることによって可能となるのではないか。マシアスの死後、マシアスに関わった二人の外国出身女性、アンジェリーナとイツコは、大統領としてではなく、マシアス・ギリという個人の死を悼んでおり、それぞれが別々の思い出を抱えながら悲しみに沈んでいる。彼女たちは、この島の共同性およびそれに繋がった《大きな流れ》としての共同性に入ることはできず、[6]マシアス・ギリという固有名を持った人間の死を《流れ》という脱現実的な虚構世界の中で理解することはできない。そして、彼女たちの悲しみこそが、本来物語に回収することのできない人間の死を、リアルに捉えているといえる。

また、物語の冒頭には、日本から来た《慰霊団》を乗せたバスが消える、という事件が据えられている。この事件自体は、マシアス失脚の前兆となった出来事として、語りの内で位置づけられる。【バス・リポート】として物語に挿入される、摩訶不思議なバスの行状について触れる余裕はないが、《バスの旅》を経た《慰霊団》の変化と、それを語る物語言説のありように注目しておきたい。《慰霊団》がナビダードに到着した時、日本側から挨拶に立ったのは、《上島元陸軍歩兵大尉》という人物であり、挨拶の内容は、スピーチ原稿《執筆者の精神が昭和十九年の段階から時代の変化というものの影響をまったく受けていない》というものであった。歓迎夕食会における《慰霊団副団長西郷元海軍少尉のスピーチ》も、その内容は同等であり、それに対してマシアスは、《まったくいい気なものだ》と呟いている。

しかし、マシアスが実質上失脚した後、姿を現したバスは、《広場》でナビダードの無名の人々に出迎えられる。そして、バスから降り立った、《慰霊団》を代表してスピーチする者の名は明かされず、《彼》の語る内容は、次のようなものとなっている。

> 《実を言えば、昔々私たちがこの島に来て行ったこと、それから戦後の数十年あの国で行ってきたこと、それらすべてについて、絶対にゆるがない価値があると信じてやってきたことの全体について、私たちはずいぶん深い反省の念をこのバスの中の日々でいだきました。》

ここから、無名の共同性が、外部からの侵入者にも影響を与えることが見て取れる。[7]あるいは、政治・経済的なレベルで繋がった外部の人間にも、無名の共同性と同調する可能性があるというべきであろうか。ただし、《慰霊団》の人々に《反省の念》を抱かせたメカニズムは、明らかではない。そうであるとはしても、名前を明かされない日本人《彼》に《反省の念》を語らせることは、無名の共同性の力が、ナビダードの外に向かっても政治・経済的な現実に影響を与える可能性を示しているといえるのかもしれない。

だが、この物語における無名の共同性が、外に向かって開かれることは可能なのか、個人の歴史性を解消する《流れ》なるものが、外部の世界でいかなる力を発揮できるのかは判然としない。《慰霊団》

の《反省の念》がいかにして生じ、どのような結末をもたらすのか。この疑問は、無名の共同性が勝利する物語の、物語としての完結を揺るがす綻びの糸となるように思われる。

また、アンジェリーナとイツコが最後に交わしている会話は、バス失踪事件の後、別の日本人を乗せたバスが消えた事件をふまえ、あからさまに日常的で資本主義的な儲け話になっている。

《「いずれ出てきますよ。みんな若くなって、元気になって。それがこの島の観光産業の目玉商品になるんです」とイツコは断言した。

「なるかしら?」

「確実でないところがいいという話ですよ。ここに観光で来て、バスに乗って、その次に自分たちは行方不明になれるのかどうか、不安と期待、これは売れますよ」

「『アンジェリーナズ・マジカル・ミステリー・ツアー』という会社を作ろうかしら?」

「いいですね。きっと儲かりますよ」そう言ってイツコはにっと笑った。》

この会話は、無名の共同性が勝利した島がまた、確実に外の世界と繋がっていることを示している。それは、無名の共同性の力をすら「消費」してしまう世界である。ここには、無名の共同性が勝利する物語に対して、日常的な政治・経済レベルの現実を、物語に対するノイズのようにしぶとく対置する、小説の意志を読みとることができる。

『マシアス・ギリの失脚』において、マシアス・ギリは無名の共同性の論理を受け入れ、その意味において物語は完結している。しかし、小説は、物語に抵抗するノイズを抱え込むことによって、安易に物語の内に自足することを回避する。そうであるからこそ、小説は、無名の共同性の内に回収されたはずの「マシアス・ギリ」の名を、あくまでもその表題として掲げ続けるのではないだろうか。

注 (1) 池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』一九九三年六月、新潮社。作品からの引用は、すべて同書に拠る。

(2) この作品の物語性については、高橋敏夫が次のように指摘している(高橋敏夫「池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』」(『國文學 解釈と教材の研究』、一九九六年七月臨時増刊号))。

〈すぐれた幻想文学は、「あるはずの、ありそうな」話とまったく別なところで自足せず、その「ありえない、ありそうもない」話を、「あるはずの、ありそうな」話にさしこみ破砕してしまう。いいかえれば、通常の常識的な話を転覆させ、もうひとつの話を浮上させるのがすぐれた幻想文学であり、したがって幻想文学はまたきわめて政治性をおびた文学ともなる。

『マシアス・ギリの失脚』は、典型的かつすぐれた幻想文学である。物語の幻想性を積極的に露呈させた物語であり、幻想文学の政治性を積極的に行使した物語である。〉

本稿では、ここでいわれている〈政治性〉の内実について検討していくことになる。

(3) 菅野昭正は、新潮文庫版『マシアス・ギリの失脚』(一九九六年六月)の「解説」において、次のように述べている。

〈じっさい、主人公マシアス・ギリは、その二つの方向のあいだで翻弄されつづける。大統領として彼は現実の猥雑さ卑小さから逃れるわけにゆかないし、他方また亡霊と対話したり、神秘と呪術の世界からの呼びかけにも答えなければならない。そして二つの狭間で引きまわされたあげく、美少女の姿で他界から忍びこんだ告発の力によって失脚する。〉

私も、マシアスが〈二つの方向のあいだで翻弄され〉るという認識

を共有する。ただし、本稿では、その一方を〈現実〉とし、他方を〈他界〉とすることは避けた。

(4) 外国出身者以外で、変わらぬ名を持ち続ける人物として、ジム・ジムソンを挙げることができる。ただし、彼は、そのことの代償であるかのように、《主席秘書官》としての仕事から逸脱することがない。当然、ユーカユーマイの祭にも参加しない。

(5) 《母の戸籍》の姓が明かされていないことから、物語言説のレベルにおいては、「ギリ」姓獲得が無名性からの脱出（＝逸脱）を示しているということができよう。

(6) ただし、イツコについては、広場の話題を漏れ聞く立場を確保していることが明かされる。このこと自体にも、物語をはみ出る小説の意義を見ることができるかもしれない。

(7) バスの失踪事件については、物語内部で、マシアスを失脚に追い込んだ《力》と同じ《力》が働いたとされている。

（やまね　しげき　松江工業高等専門学校助教授）